小学校社会科歴史学習における地域教材の開発
—山口県防府市富海を題材として—

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系
言語・社会系教科実践高度化コース
社会科教育実践分野　　実習責任教員　町　田　　哲
氏　　名　重國　悠太　　実習指導教員　梅　津　正　美

キーワード：小学校社会科、歴史学習、地域教材、地域学習、富海町、本陣、飛船

はじめに

本報告書では、小学校第6学年における地域教材の開発を目指す。現行の小学校社会科における第6学年での歴史教育は、主な歴史上の人物や歴史遺産を中心に大まかな歴史を理解する内容である。「小学校の歴史学習においては、歴史上の主な出来事や年号などを覚えることだけではなく、我が国の歴史に対する興味・関心をもち、歴史を学ぶ楽しさを味わわせるとともに、歴史を学ぶことの大切さに気付くようにする必要がある。」とある。例えば、平成29年度小学校学習指導要領解説には、歴史に興味・関心をもたせ、歴史を学ぶ楽しさを味わわせるというのであれば、児童が実際に生活している地域の歴史内容を取り入れることで、よりこの学習指導要領の内容に近づけるのではないかと考えた。

第Ⅰ部では授業で取り上げる地域の内容を授業で使えるものにするために深め、第Ⅱ部では、第Ⅰ部で研究し、深めたものを使って実際に授業案を検討した。

第Ⅰ部　近世における富海町の構造

第１章　富海村・町の成立

第Ⅰ部において、山口県防府市富海を、『防府市史通史Ⅱ近世』とその史料編、『富海本陣石川家永代日記一』、『富海本陣石川家永代日記二』、『富海町年寄御奉書并願書控一』、『富海町年寄御奉書并願書控二』、『徳山藩富海飛船根本記』をもとに検討した。

富海村・町は現在の山口県防府市に在る。ここは元和3年（1617）に毛利就隆によって分地されたことによって始まった徳山藩の所属であった。富海は徳山藩の陣屋町徳山から西へ約15㎞の海沿いに位置した。当時交通の主要な道であった山陽道が通る場所に在り、港も存在していた。

富海村・町の支配組織を見ていくと、町方には町奉行が、村方や浦には代官が置かれた。村役人としては庄屋・畔頭が、町役人には町年寄・目代が各村・町から選出され、彼らが各村・町を統括していた。

第２章　富海町の成立と空間構造

寛保元年（1741）の「御領内町方目安」によると、徳山城下以外の市町には富海町を含め11の市町があり、各市町には町年寄や目代が置かれ、町奉行の支配下にあった。このことから、遅くとも1741年までの段階に富海村の町場化した地域が富海「町」として位置付けられたと理解できる。富海町の場合、町年寄2人、目代を1人と規定していた。

富海町は、①本町筋、②浦町屋敷、③新裏屋

敷と大きく3つの区画が存在した。①本町筋は、街道（山陽道）を挟んで、全体で北側に50軒、南側に57軒、計107軒の町家が並んでいた場所である。②浦町屋敷は、海沿いに在り漁師の屋敷である浜屋敷が在った。ここでは「いさば船」30石積3隻、25石積3隻の計6隻があり、漁船は44隻あった。③新裏屋敷は、文政5年（1822）に藩による直営事業として始まった港内の開作地域にできたもので、文政8年（1825）に完成した。ここには31軒の農民が入植し、新田での生活を始めた。

富海町は山陽道の街道沿いに町場化した上記の3つの町場から構成されていた。また、寛保2年（1742）に描かれた「御国廻御行程記」では、この3つの町場と港が隣接していることが読み取れた。

第３章　富海本陣の機能と役割

富海には本陣が存在していた。一般的に本陣と呼ばれるものは、公儀役を中心に持つ天下御用公役交通組織として存在したもので、参勤交代などで交通する大名に対して公定の賃銭で使用させ、彼らの交通の便宜を図る目的があった。しかし、富海町の場合は「半宿」と呼ばれ、大名行列のような大規模な宿泊は行われず、大名行列の休息、長崎奉行やオランダ人（出島居留）、日田の御用金運送などの比較的小規模な一行の宿泊に利用されていた。

富海本陣では宿馬が14疋用意されており、その利用については巡見上使、奉幣使、諸国を巡業した遊行上人などの事例を確認することができた。

この宿駅機能を持つ富海本陣を担っていたのが、富海町の町年寄でもあった石川澄之進という人物であった。石川家は、遅くとも弘化3年（1846）12月28日時点では富海町の町年寄であった。その石川家は嘉永2年（1849）に御茶屋預りを藩に願い出ていた。また、巡見使、公儀の役人、対州御下向奉幣使に対しての御茶屋御普請を自己負担したいとの願いも出した。この2つの願いは、嘉永2年（1849）の9月10日にどちらも藩から許可が下りている。このことで、石川家は、永代御茶屋預りと永代苗字帯刀が認められた。

第４章　富海飛船の展開

富海町には宿駅機能の他に港の機能も存在した。富海町ではこの地域独特の「飛船」が発展していった。「飛船」とは近世富海町を拠点に発展した小型船（二反帆半、八石積、二人乗り）とそれによる舟運形態を指す。文化３年（1820）には、このような船が128艘あったとされている。富海の「飛船」は、小型ながら通常よりも大きな帆を使用することで、スピードを重視したと考えられる。

富海の飛船は、萩藩の役人が参勤の際に利用することで始まった。安永年間（1722年～1781年）には往来書の使用が開始された。この往来書は、出船の度に藩に許可を求め、発行を受ける通船許可証のことである。寛政5年（1793）には、船1艘に付き銀10匁を上納する条件で年に3回の往来書作成になった。こうして、「飛船」は藩による半恒常的な通船の公認が」された。さらに天保2年（1831）には往来書の作成が年1回となった。この頃になると、藩との繋がりも深くなっていた。幕末に近づくにつれて国内の人物の往来も激しくなり、富海飛船の需要も高まっていった。

小括

第Ⅰ部では、近世富海町の発展には、宿駅機能と、それと隣り合わせに在った港の機機能という地理的条件に注目し、宿駅機能を担い、一方では飛船を運航する主体的な人々の活動が大きな役割を果たしたということが明らかとなった。

第Ⅱ部　近世における富海町の発展を検討するための教材開発

第１章　教科教育課題フィールドワークの成果

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で明らかとなったことを活かし小学校第６学年での歴史教育の教材開発を行った。

また、2021 年に実施した徳島市立川内北小学校での教科教育課題フィールドワークⅠ・Ⅱで学んだことも活かすために、この教科教育課題フィールドワークⅠ・Ⅱを振り返った。

フィールドワークでは、第３学年の全３クラスに日替わりで観察することができた。筆者は３回の授業を実施し、第３学年の学習状況、児童の発達段階を主に観察し、この第Ⅱ部での教材開発に活かそうとした。

第１回目の授業では、徳島市内の２つの地域を取り上げ、その地域にはどのような特徴があるのか、地形や土地利用の観点から考えるものであった。授業では、児童の興味を引くために、実際に筆者が写真を撮りに行き、電子黒板で表示することをした。また、児童はこの授業以前に町探検で校区を歩き、大まかにどんなものがあるのか学習していたため、その体験を活かした問いを入れ、繋がりを持たせる工夫をした。しかし、この授業では 45 分の中に内容を詰め込みすぎてしまい、児童が内容を消化しきれないまま終わってしまった。

第３回目に行った授業では、徳島市川内町で採れた野菜がどこへ運ばれるのか、川内町で採れたれんこんを例に学習するものである。この授業の前には、実際にれんこん農家や農業協同組合へ見学に行き、どのように収穫され、どんな方法で出荷されるのかなど、児童は細かく学んでいる。実際に筆者が実施した授業では、このことを授業の中で振り返り、主に農業協同組合で学んだことをベースに収穫から各家庭に届くまでを学習した。しかし、授業内での筆者の発問や指示が不明確な場面があり、児童は何をしていいのか分からないという状況が何回か見受けられた。本報告の教材開発をするに際し、以上の点も克服すべき課題と考えた。

第２章　小学校６年生歴史教育における教材開発

第Ⅰ部の研究内容と、教科教育課題フィールドワークⅠ・Ⅱで学んだ点を活かして、小学校６年生の歴史教育における教材開発を行った。本教材開発は、山口県防府市富海を扱うため、山口県防府市立富海小学校を想定したものとした。扱う内容は、単元「江戸幕府と政治の安定」の中で行うこととした。この中の小単元、キリスト教の禁止鎖国の後に「地域の人々のくらし」という小単元を新たに設定し、２時間続きの授業とした。

授業の導入では、現在の富海町の地図に、本陣跡や港の様子の写真を張り付け、身近な地域に残る歴史の痕跡を示すことで、現在と江戸時代がつながっていることを児童に意識させる。その上で「江戸時代の富海町はどんな様子だったのだろう。」と本時のねらいを提示する。そして展開１で江戸時代の絵図と現在の地図を見比べて、宿駅と港の機能が隣り合わせにあるこ

とを捉える。展開２では宿駅機能について理解するために、第Ⅰ部で用いた史料の現代語訳を児童に配布する。そこから、どんな場所で、どんな人が本陣を利用していたのかを学習した上で、江戸時代、山陽道が通っていた富海は、宿駅や港があり、人やモノの流れが多い場所だったとまとめる。

続いて第２時の授業では、富海飛船の展開を学習する。本時のねらいは「江戸時代の富海町はどのようににぎわっていったのだろう。」とした。当時の史料を現代語訳したものを児童に配布し、展開１では富海飛船の発展の経緯を展開２では飛船仲間の担い手に注目する。展開３で、富海町がどのように発展していったのかを第１時の本陣の内容、第２時の飛船の内容をもとに考える。児童には、近世の街道図を確認させ、富海町では宿駅機能と港の機能が隣り合わせになっていたという地理的条件と、それを活かして活動した富海町の人々の存在が富海町の発展につながった理解させる。

本報告書で検討した授業を評価する上で、平成29年度告示の小学校指導要領解説と、ここでの小単元、「江戸幕府と政治の安定」を照らし合わせると、小学校指導要領の内容(2)ア－(キ)江戸時代の始まり、参勤交代や鎖国などの幕府の政策、身分制を手掛かりに、武士による政治が安定したことを理解すること、ア－(シ)遺跡や文化財、地図や年表などの資料で調べ、まとめること、イ－(ア)世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史上の主な事象を捉え、我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味を考え、表現することの３つが当てはまる。このことを踏まえて単元の評価規準を作成した。

おわりに

第Ⅰ部では、近世富海町においての空間とその発展を、富海本陣や富海飛船の史料をもとに検討した。近世富海町は萩藩の支藩である徳山藩の支配下であったことが分かった。富海町は街道が通っていたため、幕府や藩の役人が利用し宿駅の機能が発達し、その宿駅と隣り合わせに港があるという地理的条件から、飛船という独自のものも誕生した。その飛船は、萩藩の役人が大坂に向かうために利用し、次第に規模も大きくなり、天保２年（1831）には54名もの仲間組織に成長した。この２つが、富海町発展の大きな要因であったと明らかにした。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で明らかとなったことをふまえ、小学校第６学年での時間軸の歴史学習の中に、第３学年・第４学年での空間軸の地域学習を取り入れるというねらいのもと教材の開発を進めた。

授業では児童が見ても分かるように筆者が加工した授業資料を配布することとした。また、その資料から何が読み取れるのか資料に問いをつけ、明確になるようにした。

実際に地域の史料を活用することで十分に内容を歴史教育の中に取り入れ、時間軸と空間軸とを合わせた内容になったと考える。ただし、本教材をもとにした授業をしていないため、さらなる検討の余地がある。この点は今後の課題としたい。